

# 出土文獻に見える「氣」字について

清野 充典

## 目次

1. はじめに
2. 古代の主要な文獻に見える「氣」字について
3. 出土文獻に見える「氣」字について
  - (1) 出土文獻について
  - (2) 『包山戰國楚簡』の「氣」字
  - (3) 『望山楚簡』の「氣」字
  - (4) 『九店楚簡』の「氣」字
  - (5) 『郭店楚簡』の「氣」字
  - (6) 『上海博物館藏戰國楚竹書』の「氣」字
  - (7) 『睡虎地秦簡』の「氣」字
  - (8) 『龍崗秦簡』の「氣」字
  - (9) 『湖南大學嶽麓書院藏秦簡』の「氣」字

(10) 『馬王堆漢墓帛書』の「氣」字

(11) 出土文獻に見える「氣」字の總括

#### 4. 「氣」字について

### 1. はじめに

近年、中國各地より漢代以前の文獻が多數出土されている。その中には、既存の文獻に關する見直しに繋がる發見も少なくない。そこで、古代の主要な文獻と「氣」字の用いられかたに相違があるのか調査・検討した。

### 2. 古代の主要な文獻に見える「氣」字について

古代の主要な文獻『國語』・『論語』・『老子』・『墨子』・『列子』・『孟子』・『莊子』・『荀子』・『韓非子』・『易經』・『春秋左氏傳』・『周禮』・『儀禮』・『禮記』・『管子』・『呂氏春秋』・『淮南子』十七種類に見える、七百六十七箇所の「氣」字を、『十三經注疏校勘記』・『皇清經解』等に従い本文を検討した結果、對象とすべき「氣」字は、七百六十四箇所であった。そのうち「氣」字が單獨で用いられていたのは百九十二箇所である。『國語』の底本は「天聖明道本」の『國語』、『論語』の底本は『重刊宋本論語注疏』、『老子』の底本は「底本には、四部叢刊所收の宋版河上公本を用い、武内義雄博士の校定された河上公本（岩波文庫）」と、馬敘倫の老子數古によって、王弼本・傳奕本を参考にし、底本の一部を改めた」とする阿部吉雄・山本敏夫・市川安司・遠藤哲夫著の『老子』、『墨子』

の底本は孫詒讓『墨子問詁』、『列子』の定本は「明の世徳堂本の寛政覆刻本を底本とし、これに南北兩宋刊本や諸本を校比して、その善なるものに從つた」とする小林信明の『列子』、『孟子』の底本は『孟子注疏』、『莊子』の底本は『莊子集解』、『荀子』の定本は『南宋臺州刊本』の『荀子』、『韓非子』の底本は『吳氏覆刻乾道本』の『韓非子』、『易經』の底本は『周易正義』阮元本（『易』の本文に「氣」字は見られないが、『易』は焚書坑儒を免れ、漢代以降も重要な書物として取り扱われるようになり、様々な注釋がなされ『易經』として讀み繼がれていることから、『易經』に見える「氣」字を見てみることにした。）、『春秋』の底本は『春秋左傳正義』阮元本（『春秋』の本文に「氣」字は見られないが、右記と同様の理由で檢討）、『周禮』の定本は『周禮注疏』阮元本、『儀禮』の定本は『儀禮注疏』阮元本、『禮記』の定本は『禮記注疏』阮元本、『管子』の底本は『明趙氏本管子』、『呂氏春秋』の定本は許維通『呂氏春秋集釋』、『淮南子』の定本は『淮南鴻烈集解』とした。尚、主要な文獻の中で本來對象とすべき『詩經』・『書經』の本文に「氣」の字は見られない。『詩經』は殷や周王朝から春秋期にかけて黃河流域を中心として各地から集められた古代歌謠とされる。漢代になり五經の一つとされた『詩經』に「氣」字が見られないのは不思議である。「氣」の思想は、當時の人民間では一般的ではなかったのではないかと推測する。また、同じく五經の一つとされる『書經』は、古くは『尚書』と言われた。編纂者や成立年代が不明である。『詩經』とならび古代思想が書き表された代表的な書物であるが、「氣」字が見られない理由を類推することは、現段階では困難である。「氣」字の用例を檢討できないため、『詩經』・『書經』は古代の主要な文獻より除外した。『列子』の成立に關しては、晉の張湛が著した『列子序』に詳しく述べられているが、劉向が『書錄』にて假託の記ではないかという説などに見られるように、『列子』に對する疑點がある。また、漢代以降の思想や資料と考えられるものの中に、佛教の影響下にあることを論じる人が少なくない。しかしながら、劉向の説には確證がないことや佛教思想と

の關聯性を決定づける論證がないことに加え、『莊子』との符節を合する文章が少なくなく、『列子』と漢代諸書との關係を論じた物では最も秀逸とされる柿村重松の『列子疏證』では、『列子』は斷じて漢代の作だと言っていることから、ここでは、古代の主要な文獻として取り扱う。尚、醫學に關聯した「氣」字を検討對象としたため、歴史や兵法に關する文獻は、今回對象外とした。

「氣」字が單獨で用いられていた頻度を書物別にみると、『國語』三字、『論語』用例無し、『老子』一字、『墨子』用例無し、『列子』十五字、『孟子』十四字、『莊子』十八字、『荀子』四字、『韓非子』三字、『易經』二字、『春秋左氏傳』七字、『周禮』五字、『儀禮』用例無し、『禮記』十七字、『管子』二十八字、『呂氏春秋』十八字、『淮南子』五十五字である。單獨で用いられている比率が高い書物は、『禮記』、『莊子』、『呂氏春秋』、『管子』、『淮南子』である。

「氣」字を用いた用語は百九十一有り、五百七十二箇所にわたり用いられていた。「氣」の用語は、以下の通りである。

「氣」、「土氣」、「陽氣」、「血氣」、「天地之氣」、「沈氣」、「辭氣」、「屏氣」、「食氣」、「專氣」、「冲氣」、「望氣」、「將氣」、「增氣」、「繼氣」、「志氣」、「往氣」、「來氣」、「敗氣」、「客之氣」、「民之氣」、「積氣」、「氣專志」、「冲和氣」、「二氣」、「天地強陽氣」、「純氣」、「神氣」、「氣息」、「衡氣」、「陰氣」、「陰陽之氣」、「地氣」、「形氣」、「香氣」、「氣力」、「胎氣」、「糟漿之氣」、「氣幹」、「浩然之氣」、「夜氣」、「守氣」、「平旦之氣」、「雲氣」、「六氣」、「人氣」、「噫氣」、「氣母」、「天氣」、「邪氣」、「分滯之氣」、「彊陽氣」、「春氣」、「馮氣」、「治氣」、「逆氣」、「順氣」、「爭氣」、「氣色」、「邪汙之氣」、「失氣」、「和氣」、「氣稟」、「變氣」、「氣力」、「同氣」、「二氣」、「精氣」、「勇氣」、「亂氣」、「聲氣」、「客氣」、「五氣」、「上氣」、「氣聽」、「金與錫黑濁之氣」、「黃白之氣」、「青白之氣」、「青氣」、「發氣」、「絕氣」、

「魂氣」、「生氣」、「煖氣」、「心氣」、「養氣」、「秋氣」、「殺氣」、「民氣」、「知氣」、「秀氣」、「氣臭」、「鬱氣」、「玉氣」、「氣體」、「口澤之氣」、「盛氣」、「剛氣」、「柔氣」、「條暢之氣」、「邪僻之氣」、「四氣」、「樂氣」、「氣志」、「天地嚴凝之氣」、「天地之尊嚴氣」、「天地之義氣」、「天地溫厚之氣」、「天地之盛德氣」、「天地之仁氣」、「擔氣」、「怨氣」、「燥氣」、「氣和」、「溼氣」、「賊氣」、「善氣」、「懼氣」、「平氣」、「餘氣」、「愛氣」、「風氣」、「意氣」、「氣淵」、「寬氣」、「靈氣」、「霧氣」、「寒氣」、「水氣」、「木氣」、「火氣」、「金氣」、「煨氣」、「同氣」、「嘉氣」、「滔蕩之氣」、「氣霧」、「惡氣」、「竅氣」、「塵氣」、「吸氣」、「驢驚之氣」、「殞氣」、「正氣」、「吐氣」、「含氣」、「山氣」、「氣勢」、「薄氣」、「蔚氣」、「日月之淫氣」、「偏氣」、「十二時之氣」、「德氣」、「八紘之氣」、「澤氣」、「障氣」、「林氣」、「岸下氣」、「石氣」、「險阻氣」、「暑氣」、「谷氣」、「丘氣」、「衍氣」、「陵氣」、「筋氣」、「正土之氣」、「偏土之氣」、「牡土之氣」、「弱土之氣」、「牝土之氣」、「損氣」、「飲氣」、「陰陽同氣」、「煩氣」、「人之氣」、「接氣」、「賊氣」、「蒸氣」、「氣矜」、「音氣」、「氣意」、「失氣」、「虛實之氣」、「燥溼之氣」、「燥濕之氣」、「牛馬之氣」、「蟻蝨之氣」、「怨思之氣」、「同氣」之應。

また、検討した十七種類に見える「氣」の用語と用いられた回数を書き記す。括弧内は用いられている数である。

『國語』(八) 「氣」(三三)、「土氣」(一一)、「陽氣」(一一)、「血氣」(一一)、「天地之氣」(一一)、「沈氣」(一一)。

『論語』(六) 「血氣」(三三)、「辭氣」(一一)、「屏氣」(一一)、「食氣」(一一)。

『老子』(三三) 「專氣」(一一)、「冲氣」(一一)、「氣」(一一)。

『墨子』(二十一) 「望氣」(七)、「將氣」(三三)、「氣」(一一)、「血氣」(一一)、「增氣」(一一)、「繼氣」(一一)。

「志氣」(一一)、「往氣」(一一)、「來氣」(一一)、「敗氣」(一一)、「客之氣」(一一)、「民之氣」(一一)。

『列子』(四十四) 「氣」(十五)、「積氣」(五)、「血氣」(三三)、「土氣」(三三)、「氣專志」(一一)、「冲和氣」(一一)。

「一氣」(一)、「天地強陽氣」(二)、「純氣」(二)、「神氣」(一)、「氣息」(一)、「衡氣」(一)、「陰氣」(二)、「陽氣」(一)、「陰陽之氣」(一)、「地氣」(一)、「形氣」(一)、「香氣」(一)、「氣力」(二)、「胎氣」(一)、「糟漿之氣」(一)、「氣幹」(一)。

【孟子】(二十)

「氣」(十四)、「浩然之氣」(二)、「夜氣」(二)、「守氣」(一)、「平旦之氣」(一)。

【莊子】(四十六)

「氣」(十八)、「雲氣」(五)、「六氣」(三)、「一氣」(二)、「神氣」(二)、「人氣」(一)、「氣息」(二)、「噫氣」(一)、「氣母」(一)、「陰陽之氣」(一)、「衡氣」(一)、「血氣」(一)、「天氣」(二)、「地氣」(一)、「邪氣」(一)、「純氣」(一)、「分溼之氣」(一)、「彊陽氣」(一)、「春氣」(一)、「志氣」(一)、「馮氣」(一)。

【荀子】(二十七)

「血氣」(十二)、「氣」(四)、「治氣」(三)、「逆氣」(二)、「順氣」(二)、「爭氣」(一)、「氣色」(二)、「邪汙之氣」(一)、「失氣」(一)、「辭氣」(一)。

【韓非子】(九)

「氣」(三)、「和氣」(二)、「血氣」(一)、「氣稟」(一)、「變氣」(一)、「氣力」(一)。

【易經】(六)

「氣」(二)、「同氣」(一)、「陽氣」(一)、「二氣」(一)、「精氣」(一)。

【春秋左氏傳】(十九)「氣」(七)、「六氣」(四)、「血氣」(二)、「勇氣」(一)、「亂氣」(一)、「聲氣」(一)、「守氣」(一)、「一氣」(一)、「客氣」(一)。

【周禮】(十七)

「氣」(五)、「地氣」(三)、「五氣」(一)、「上氣」(一)、「陰陽之氣」(一)、「氣聽」(一)、「金與錫黑濁之氣」(一)、「黃白之氣」(一)、「青白之氣」(一)、「青氣」(一)、「血氣」(一)。

【儀禮】(三)

「發氣」(二)、「絕氣」(一)。

【禮記】(九十八)

「氣」(十七)、「陽氣」(八)、「血氣」(六)、「陰氣」(五)、「地氣」(五)、「氣志」(五)、「

「和氣」(四)、「寒氣」(四)、「天氣」(三)、「魂氣」(二)、「神氣」(二)、「順氣」(二)、「逆氣」(二)、「生氣」(二)、「春氣」(一)、「煖氣」(一)、「心氣」(一)、「養氣」(一)、「秋氣」(一)、「殺氣」(一)、「民氣」(一)、「知氣」(一)、「秀氣」(一)、「氣臭」(一)、「天地之氣」(一)、「鬱氣」(一)、「玉氣」(一)、「氣體」(一)、「口澤之氣」(一)、「盛氣」(一)、「剛氣」(一)、「柔氣」(一)、「條暢之氣」(一)、「邪僻之氣」(一)、「四氣」(一)、「樂氣」(一)、「邪氣」(一)、「絕氣」(一)、「志氣」(一)、「天地嚴凝之氣」(一)、「天地之尊嚴氣」(一)、「天地之義氣」(一)、「天地溫厚之氣」(一)、「天地之盛德氣」(一)、「天地之仁氣」(一)。「管子」(百十七)「氣」(二十八)、「担氣」(十)、「陽氣」(六)、「陰氣」(六)、「地氣」(五)、「精氣」(五)、「和氣」(四)、「怨氣」(四)、「血氣」(四)、「天氣」(三)、「變氣」(三)、「逆氣」(三)、「雲氣」(三)、「燥氣」(二)、「邪氣」(二)、「氣和」(二)、「絕氣」(二)、「溼氣」(二)、「賊氣」(二)、「善氣」(二)、「惡氣」(二)、「氣情」(二)、「天地之氣」(一)、「天地氣」(一)、「六氣」(一)、「懼氣」(一)、「平氣」(一)、「餘氣」(一)、「愛氣」(一)、「風氣」(一)、「意氣」(一)、「鬱氣」(一)、「氣滯」(一)、「心氣」(一)、「寬氣」(一)、「靈氣」(一)、「霧氣」(一)。「呂氏春秋」(百)「氣」(十八)、「陽氣」(九)、「精氣」(六)、「寒氣」(五)、「民氣」(四)、「地氣」(四)、「水氣」(三)、「心氣」(三)、「志氣」(三)、「意氣」(三)、「陰氣」(二)、「天氣」(二)、「土氣」(二)、「木氣」(二)、「火氣」(二)、「金氣」(二)、「春氣」(二)、「秋氣」(二)、「氣志」(二)、「雲氣」(二)、「血氣」(二)、「煙氣」(一)、「同氣」(一)、「生氣」(一)

「形氣」(一)、「神氣」(一)、「邪氣」(一)、「天地之氣」(二)、「風氣」(二)、「嘉氣」(二)、「滔蕩之氣」(二)、「二氣」(二)、「殺氣」(二)、「氣霧」(二)、「陰陽之氣」(二)、「惡氣」(二)、「竅氣」(二)、「塵氣」(二)、「吸氣」(二)、「驢驚之氣」(二)、「殞氣」(二)。

『淮南子』(二百二十)「氣」(五十五)、「陽氣」(十六)、「血氣」(十二)、「陰氣」(十)、「氣志」(七)。

「陰陽(之)氣」(六)、「寒氣」(五)、「風氣」(五)、「地氣」(四)、「邪氣」(四)、「精氣」(四)、「天氣」(四)、「民氣」(三)、「氣力」(三)、「天地之氣」(三)、「神氣」(三)、「二氣」(三)、「生氣」(二)、「正氣」(二)、「吐氣」(二)、「含氣」(二)、「山氣」(二)、「人氣」(二)、「春氣」(二)、「秋氣」(二)、「氣勢」(二)、「薄氣」(二)、「蔚氣」(二)、「熱氣」(二)、「火氣」(二)、「水氣之精」(二)、「日月之淫氣」(二)、「偏氣」(二)、「合氣」(二)、「十二時之氣」(二)、「德氣」(二)、「雲氣」(二)、「八紘之氣」(二)、「澤氣」(二)、「障氣」(二)、「林氣」(二)、「木氣」(二)、「岸下之氣」(二)、「石氣」(二)、「險阻氣」(二)、「暑氣」(二)、「谷氣」(二)、「丘氣」(二)、「衍氣」(二)、「陵氣」(二)、「筋氣」(二)、「正土之氣」(二)、「偏土之氣」(二)、「牡土之氣」(二)、「弱土之氣」(二)、「牝土之氣」(二)、「煙氣」(二)、「損氣」(二)、「殺氣」(二)、「飲氣」(二)、「陰陽同氣」(二)、「逆氣」(二)、「煩氣」(二)、「冲氣」(二)、「人之氣」(二)、「志氣」(二)、「接氣」(二)、「賊氣」(二)、「蒸氣」(二)、「氣矜」(二)、「音氣」(二)、「望氣」(二)、「氣意」(二)、「失氣」(二)、「虛實之氣」(二)、「燥溼之氣」(二)、「燥濕之氣」(二)、「形氣」(二)、「牛馬之氣」(二)、「蟣蟲之氣」(二)、「怨思之氣」(二)、「同氣之應」(二)。



右記書物に最も多く見える用語は、十七種類中十三種類に見える「血氣」である。「血氣」は、四十八箇所に見える。次に多い用例は、「陽氣」である。十七種類中七種類に見える、四十四箇所に見える。また、陰氣・陽氣と合わせて用いている用語六箇所を加えると五十箇所にわたる。その次に多い用例は「天地」を含む用語である。十七種類中八種類に見え、「天地」が十五箇所、「天」が十三箇所、「地」が二十三箇所、合わせて五十一箇所に用いられている。この三用語に共通しているのは「國語」に用いられているという點である。『詩經』・『書經』や『易』・『春秋』の本文に、「氣」の字は見られない。平岡禎吉は、「普通に説かれる年代に従えば」と前置きして、「氣」が最初に用いられたのは、『國語』周語上篇、周の宣王即位の條（紀元前八二八年）であるという。その本文は、

古者大史順時覲土、陽燿憤盈、土氣震發、農祥晨正、日月底於天廟、土乃脉發。先時九日、大史告稷曰、自今至於初吉、陽氣俱蒸、土膏其動。弗震弗渝、脉其滿膏、穀乃不殖。

古者は大史時に順ひて土を覲る、陽燿く憤盈し、土氣震發し、農祥晨に正しく、日月天廟に底り、土乃ち脉發す。時に先んずること九日、大史稷に告げて曰く、今自り初吉に至り、陽氣俱に蒸り、土膏其れ動かん。震かず渝がずんば、脉其れ滿膏して、穀乃ち殖せず、と。

昔、太史が季節の變化に隨つて、土脉の陰陽の變化を觀察します。陽氣が厚く充滿し、土氣が激動し始めると、農耕の吉兆である房宿（さそり座）が、朝はやに南天に正しく位置し、日月は室宿（ベガス座）に進んで、土脉は動き出します。生月朔日より九日前に、太史が農官の長の稷に告げて言う。「今から正月朔日までに、陽氣は一齊に上昇し、土は潤い動き始めます。土氣が動かず陽氣が發散しないならば、土脉は充結して災易となり、五穀は繁殖しません」と。

である。宣王の父、厲王の暴虐で周王朝は衰微したが、宣王が善政を敷き、周王朝を中興したことから、『詩經』小雅篇や大雅篇に宣王を讃える歌が多いが、『國語』に書かれてあることは、經典として中國で尊重されて來た『詩經』と内容に共通しているものが多い。『國語』の成立年代ははっきりしないが、『春秋』の記録とはほぼ平行と大野峻<sup>(四)</sup>は言っている。『孟子』滕文公章句下に、

世衰道微、邪說暴行有作。臣弑其君者有之、子弑其父者有之。孔子懼、作春秋。春秋天子之事也。是故孔子曰、知我者、其惟春秋乎。罪我者、其惟春秋乎。

世衰へ道微にして、邪說暴行有<sup>また</sup>作る。臣にして其の君を弑する者之れ有り。子にして其の父を弑する者之れ有り。孔子懼れ、春秋を作る。春秋は天子の事也。是の故に孔子曰く、我を知る者は、其れ惟春秋か。我を罪する者も、其れ惟春秋か。

世の中が衰えて道があまり行われなくなると、邪說や暴行が再び起こるようになった。臣下でありながら自分の君主を殺す者が現れ、子どもでありながら自分の父親を殺す者が現れた。孔子はそのような世の中を恐れ、春秋を作った。春秋は天子の事を書き表した。だから、孔子が言うには、自分を理解する者は、ただただ春秋という書物によってであろう。自分がそしりを受けるのも、ただただ春秋という書物によってであろう。

とある。また、同じく『孟子』滕文公章句下に、

昔者禹抑洪水而天下平。周公兼夷狄、驅猛獸而百姓寧。孔子成春秋而亂臣賊子懼。

昔、禹は洪水をとどめたことにより天下はおだやかになった。周公は野蠻人を併合し、猛獸を追い出したことにより百姓は安らかになった。孔子は『春秋』を編纂したことにより亂臣や賊子は恐れてかたよった行

いを防ぐことに繋がった。

とあり、孟子（紀元前三七二—二八九）は、孔子が『春秋』を表したことに言及している。以後、『春秋』は孔子が制作した書物とされていることから、『國語』は孔子が生存していた紀元前五五二年から四七九年頃に書かれた書物ではないかと推測される。『國語』に見える他の二用例において、「土氣」は六箇所しか用いられておらず、「沈氣」は他に用例が見られない。「氣」の思想は、『國語』に見える「氣」の用いられ方が、時代が下るに従い變化したのではないかと考えさせられる事實である。

「氣」字のみを含む「氣」字が用いられた百九十二の用語が用いられた文章を抜き出し、「氣」字が用いられている意味を全て検討した結果、「氣」字は自然界の事物やヒトの「働（五云）き」を表している辭であると考えられた。そのことに基づき、百九十二の用語は以下の四つに分類されることが分かった。

(1) 「氣」字を「自然界の働（五云）き」として捉えている辭

(2) 「氣」字を「呼吸の働（五云）き」として捉えている辭

(3) 「氣」字を「身體の働（五云）き」として捉えている辭

(4) 「氣」字を「心の働（五云）き」として捉えている辭

「氣」の字形は、周末には卜辭「三」である「气」の字に、神靈的、祭祀的な古い觀念を示す「火」や飲食的肉體的なものに變化したことを示す「米」が加わって「氣」や「氣」が作られたと考えられており、その意義は、「气」の字義である「迄」・「終止」・「雲气」や「氣」の字義である「饋（五云）る」、「蒸氣（五云）」、「氣息（五云）」であるとされている。「氣」が最初に用いられた『國語』周語上篇の本文は、

古者大史順時視土、陽瘴憤盈、土氣震發、農祥晨正、日月底於天廟、土乃脉發。先時九日、大史告稷曰、自

今至於初吉、陽氣俱蒸、土膏其動。弗震弗渝、脉其滿膏、穀乃不殖。

古者は大史時に順ひて土を覩る、陽痺く憤盈し、土氣震發し、農祥晨に正しく、日月天廟に底り、土乃ち脉發す。時に先んずること九日、大史稷に告げて曰く、今自り初吉に至り、陽氣俱に蒸り、土膏其れ動かん。震かず渝がずんば、脉其れ滿膏して、穀乃ち殖せず、と。

昔、太史が季節の變化に隨つて、土脉の陰陽の變化を觀察します。陽氣が厚く充滿し、土氣が激動し始めると、農耕の吉兆である房宿(さそり座)が、朝はやに南天に正しく位置し、日月は室宿(ベガス座)に進んで、土脉は動き出します。生月朔日より九日前に、太史が農官の長の稷に告げて言う。「今から正月朔日までに、陽氣は一齊に上昇し、土は潤い動き始めます。土氣が動かず陽氣が發散しないならば、土脉は充結して災易となり、五穀は繁殖しません」と。

とあり、「土氣」を「土」の「働き」、「陽氣」を「陽」の「働き」と解釋できる。「土氣」や「陽氣」は「自然界の働き」を意味している辭であると考ええる。同様に主要な文獻十七種類を檢討した結果、百三の辭が見られた。

また、「國語」周語中篇に、

且唯戎翟、則有體薦。夫戎翟、冒没輕儻、貪而不讓、其血氣不治、若禽獸焉。

且つ唯戎翟のみは、則ち體薦有り。夫れ戎翟は、冒没輕儻にして、貪りて讓らず、其の血氣治らず、禽獸の若し。

その上戎翟に對しては、まるごとの料理を出すことがあります。戎翟は、直情徑行つ輕率無禮で、貪欲で讓ることなく、その血氣が盛んで鎮まることが無く、けだもののようなものです。

とある。ここで用いられている「氣」は、「氣息」という原義があることを考えると、身體に關聯した用い方とし

て派生したものと思われる。ここでは、食事に關係した用例であることから「氣息」の意味を含み「呼吸の働き」を意味している。また、「血」という身體を構成している物の意味や「血の働き」を表す意味や「貪而不讓」とあることから、「心の働き」を意味している。「血氣」は、「呼吸の働き」、「身體の働き」や「心の働き」を表す辭であると考えられる。同様に主要な文獻十七種類を検討した結果、「呼吸の働き」として捉えている辭は十九、「身體の働き」として捉えている辭は三十七、「心の働き」として捉えている辭は七十一見られた。

右記分類に基づいて分類した用語の用例を検討した結果、同じ用語が様々な意味を兼ね備えて用いられている。以下列記する。

(1) 「氣」字を「自然界の働き」として捉えている辭 (百三)

氣、土氣、陽氣、天地之氣、沈氣、冲氣、望氣、將氣、往氣、來氣、敗氣、冲和氣、一氣、積氣、天地彊陽氣、純氣、陰陽之氣、地氣、形氣、氣力、浩然之氣、平旦之氣、夜氣、雲氣、六氣、氣母、彊陽氣、春氣、變氣、二氣、精氣、金與錫黑濁之氣、黃白之氣、青白之氣、青氣、煖氣、養氣、秋氣、殺氣、秀氣、條暢之氣、四氣、天地嚴凝之氣、天地之尊嚴氣、天地之義氣、天地溫厚之氣、天地之盛德氣、天地之仁氣、燥氣、溼氣、氣和、平氣、餘氣、愛氣、風氣、善氣、惡氣、賊氣、霧氣、寒氣、水氣、木氣、火氣、金氣、煖氣、嘉氣、氣霧、塵氣、殞氣、吐氣、含氣、煩氣、山氣、日月之淫氣、偏氣、十二時之氣、德氣、八紘之氣、澤氣、障氣、林氣、岸下氣、石氣、險阻氣、暑氣、谷氣、丘氣、衍氣、陵氣、正土之氣、偏土之氣、牡土之氣、弱土之氣、牝土之氣、損氣、陰陽同氣、賊氣、蒸氣、音氣、燥溼之氣、燥濕之氣、牛馬之氣、蟣蝨之氣

(2) 「氣」字を「呼吸の働き」として捉えている辭 (十九)

氣、血氣、屏氣、糟漿之氣、氣息、噫氣、馮氣、亂氣、聲氣、氣聽、發氣、氣臭、鬱氣、養氣、玉氣、氣

志、惡氣、洩氣、吸氣。

(3) 「氣」字を「身體の働き」として捉えている辭(三十七)

氣、血氣、辭氣、食氣、增氣、繼氣、志氣、衡氣、胎氣、氣幹、守氣、馮氣、氣色、失氣、和氣、氣稟、同氣、亂氣、聲氣、上氣、五氣、生氣、氣臭、鬱氣、養氣、玉氣、氣體、盛氣、氣志、意氣、惡氣、竅氣、洩氣、筋氣、飲氣、接氣、氣意。

(4) 「氣」字を「心の働き」として捉えている辭(七十一)

氣、血氣、辭氣、專氣、志氣、客之氣、氣專志、積氣、神氣、氣息、衡氣、香氣、平旦之氣、夜氣、邪氣、忿滯之氣、馮氣、治氣、逆氣、順氣、爭氣、邪汗之氣、失氣、和氣、氣稟、同氣、勇氣、客氣、亂氣、聲氣、發氣、絕氣、魂氣、心氣、民氣、知氣、氣臭、鬱氣、玉氣、口澤之氣、剛氣、柔氣、邪僻之氣、樂氣、氣志、擔氣、怨氣、懼氣、氣澀、意氣、寬氣、靈氣、氣情、同氣、滔蕩之氣、惡氣、竅氣、驥驚之氣、洩氣、正氣、氣勢、薄氣、蔚氣、人之氣、接氣、氣矜、氣意、失氣、虛實之氣、怨思之氣、同氣之應。

「氣」の字は、天地の間に存在する人間を「氣」字で表現しようとしていたことも見て取れる。天地自然と人體に關わる力・働きを、「氣」に込めたのではないかと思われる。そのことは、「中國の醫學」に關聯していると言える。池田知久は、「道家思想が誕生したのは紀元前三〇〇年を中心とする戰國中期のことであるが、この時すでに、人間という存在者が原理的に身體と精神から成るとする二元論が成立していた」と言っている。

「氣」字を、呼吸・身體・心の働きと捉えている辭を列記したが、これを人體に關聯した用語として整理すると以下のようになる。

「人體(醫學)に關聯した辭」(九十四)

氣、血氣、屏氣、糟漿之氣、氣息、噫氣、馮氣、亂氣、聲氣、氣聽、發氣、氣臭、鬱氣、養氣、玉氣、氣志、惡氣、殞氣、吸氣、辭氣、食氣、增氣、繼氣、志氣、衡氣、胎氣、氣幹、守氣、氣色、失氣、和氣、氣稟、同氣、亂氣、聲氣、上氣、五氣、生氣、氣體、盛氣、意氣、竅氣、筋氣、飲氣、接氣、氣意、專氣、客之氣、氣專志、積氣、神氣、香氣、平旦之氣、夜氣、邪氣、忿濫之氣、治氣、逆氣、順氣、爭氣、邪汗之氣、勇氣、客氣、絕氣、魂氣、心氣、民氣、知氣、口澤之氣、剛氣、柔氣、邪僻之氣、樂氣、擔氣、怨氣、懼氣、氣淵、寬氣、靈氣、氣情、滔蕩之氣、竅氣、驥驚之氣、正氣、氣勢、薄氣、蔚氣、人之氣、接氣、氣矜、氣意、虛實之氣、怨思之氣、同氣之應。

「氣」字自體が呼吸を表す辭であることから、「呼吸」を表す辭にそれほど擴がりを見せなかつたのではないかと推測するが、「心」に關する用例が多いことから、古代人は、人間の「心の働き」を重要視していたことが解る。

「自然界の働きとして捉えている辭」百三例と「人體（醫學）に關聯した辭」九十四例の中で、雙方に解釋されるところと思われたのは、「氣」・「養氣」・「惡氣」・「殞氣」・「積氣」・「平旦之氣」・「夜氣」の七例であるが、現在「中國の醫學」で用いている用語で、「自然界の働きとして捉えている辭」の中に含まれている用語も少なくない。漢代以降、「氣」字の解釋は更に擴がりを見せたことが豫測できる。

## 注

2. 古代の主要な文獻に見える「氣」字について

(一) 『詩經』上、石川忠久著、明治書院、一九九七年（平成九年）九月、一頁。

(二) 『列子』、小林信明著、明治書院、昭和四二年五月、一〜二二頁。

(三) 『淮南子に現れた 氣の研究』、平岡禎吉著、理想社、一九六八年（昭和四三年）一〇月改訂、三三七〜

三三八頁。

(四) 『國語』上、大野峻著、明治書院、一九七五年(昭和五〇年) 一二月、五頁。

(五) 『氣の思想 中國における自然觀と人間觀の展開』、小野澤精一・福永光司・山井湧編、東京大學出版會、

一九七八年(昭和五三年) 三月、一四頁。

(六) 『氣——論語からニューサイエンスまで——』、丸山敏秋著、東京美術、一九八五年(昭和六一年) 八月、一五頁。

(七) 『氣の研究』、黒田源次著、東京美術、一九七八年(昭和五三年) 七月、一七—一九頁。

(八) 『淮南子に現れた 氣の研究』、平岡禎吉著、理想社、一九六八年(昭和四三年) 一〇月改訂、三五七—

三五八頁。

(九) 『氣の思想 中國における自然觀と人間觀の展開』、小野澤精一・福永光司・山井湧編、東京大學出版會、

一九七八年(昭和五三年) 三月、一六—一七頁。

(一〇) 『漢字の起源』、加藤常賢著、角川書店、一九七〇年(昭和四五年) 九月、二四七頁。

(一一) 『漢字の語源』、山田勝美著、角川書店、一九七六年(昭和五一年) 三月、一一〇頁。

(一二) 『道家思想の新研究——『莊子』を中心として』、池田知久著、汲古書院、二〇〇九年(平成二二年) 二月、五〇—二頁。



### 3. 出土文獻に見える「氣」字について

#### (1) 出土文獻について

出土文獻の中には、『周易』、『書經』、『詩經』、『禮記』、『老子』など、既存の主要な古典と密接な関係を持つ諸文獻の他、儒家・道家・兵家系などの知られざる思想文獻が大量に含まれている。解讀次第では、中國古代思想史研究において、大きな影響を及ぼすことが考えられる。近年における、主な出土資料や文物『包山戰國楚簡』・『望山楚簡』・『九店楚簡』・『郭店楚簡』・『上海博物館藏戰國楚竹書』・『睡虎地秦簡』・『龍崗秦簡』・『湖南大學嶽麓書院藏秦簡』・『馬王堆漢墓帛書』に見える「氣」字を検討する。

尚、北京大學藏秦簡については、まだ圖版が断片的にしか公開されておらず、釋文に關して一篇を通して全體が公表されている文獻はないことから、ここでは、檢討對象より除外する。また、清華大學が入手した「清華大學竹簡」も、『清華大學藏戰國竹簡(參)』までしか出版されていないことから、今回の檢討對象とはしないこととする。

#### 注

3. 出土文獻に見える「氣」字について

(1) 出土文獻について

(一) 『中國出土文獻研究會』ホームページ <http://www.shuudo.org/literature> を参照。一九九八年秋に「郭店楚簡研究會」として發足。その後、二〇〇一年の上博楚簡の公開を受けて「戰國楚簡研究會」と改稱し、

さらに、清華大學竹簡、北京大學竹簡、嶽麓書院秦簡などの相次ぐ公開によって、二〇一〇年に「中國出土文獻研究會」と改稱。二〇一〇年十一月一七日。

(二) 馬王堆出土文獻譯注叢書「老子」、池田知久著、東方書店、二〇〇六年(平成一八年)七月、一〜二頁。

## (2) 『包山戰國楚簡』の「氣」字

『包山戰國楚簡』は、一九八六年(昭和六一年)から一九八七年(昭和六二年)にかけて湖北省荊門市で発見された戰國中期の墓葬から出土した竹簡群の資料である。出土した場所は包山の五墓ある墓葬中の二號墓で、墓主は楚の左尹・劬廝である。埋葬したのは紀元前三一六年頃と考えられている。一九九一年に、文物出版社より發掘報告と竹簡の寫眞・釋文・注釋を付したテキストが出版されている。

『包山戰國楚簡』に「氣」字は見あたらぬ。張守中は、「既」の字に「火」が入った「𠄎」字三字を「氣」と解釋している。第二一九簡は、

東周之客𠄎經遑(歸)復(作)於菽(裁)郢戡(之歲)、食月己酉之日、𠄎吉以保𠄎爲左尹邵𠄎貞(貞)、以其下心而疾、少𠄎、𠄎(恆)貞(貞)吉。

と解釋し、第二二〇簡は、

東周之客𠄎經遑(歸)復(作)於菽(裁)郢之戡(歲)、食月己酉之日、𠄎光以長𠄎爲左尹邵𠄎貞(貞)、以其下心而疾、少𠄎、𠄎(恆)貞(貞)吉、庚辛又勿、𠄎遑、不遑於𠄎易、同𠄎。

と解釋し、第二四九簡は、

大司馬𠄎愾救𠄎之戡(歲)、頭(夏)𠄎之月己亥之日、觀義以保𠄎爲左尹邵𠄎貞(貞)、以其又瘡𠄎、𠄎𠄎、尚

母死、義占之死（恆）自（貞）、不死。

と解釋している。右記用例は、「少𣦵」が二回と「𣦵𣦵」である。意味は良く判らないが、「少𣦵」の一字前にはいずれも「疾」があり、「𣦵𣦵」の二字後ろには「死」があることから、醫學に關係した辭として用いられているのではないかと考える。「𣦵」の字は、「氣」と關係が有る字ではないかと思われる。

## 注

3. 出土文獻に見える「氣」字について

(2) 『包山戰國楚簡』の「氣」字

(一) 『簡牘名蹟選3 湖北編(一)』、西林昭一責任編集、二玄社、二〇〇九年（平成二十二年）四月、七〇頁。

(二) 『包山戰國楚簡文字編』、張守中撰集、文物出版社、一九九六年（平成八年）八月。

(三) 『包山楚簡』、湖北省荊沙鐵路考古隊、文物出版社、一九九一年（平成三年）一〇月、三四・三七頁。圖版

九七・一〇九。

(3) 『望山楚簡』の「氣」字

『望山楚簡』は、一九六五年（昭和四〇年）に請江陵縣裁縫郷（いまの荊門市に屬す）望山の二・二號墓で出土した、戰國中期の簡牘である。墓主は玆固で楚の王族と見られている。<sup>(2)</sup>『望山楚簡』に、「氣」字は見あたらぬ。<sup>(3)(4)</sup>

注

3. 出土文獻に見える「氣」字について

(3) 『望山楚簡』の「氣」字

(一) 『簡牘名蹟選3 湖北編(一)』、西林昭一責任編集、二玄社、二〇〇九年(平成二二年)四月、七〇頁。

(二) 『望山楚簡文字編』、程燕著、中華書局、二〇〇七年(平成一九年)二月。

(三) 『望山楚簡』、湖北省文物考古研究所、北京大學中文系編、中華書局、一九九五年(平成七年)六月。

(4) 『九店楚簡』の「氣」字

『九店楚簡』は、一九七八年に湖北省江陵縣九店發掘東周墓五九六座中、戰國時期の楚墓である五六號、六二二號の兩墓から出土した二三四の竹簡である。その中に、「氣」字は見あたらぬ。

注

3. 出土文獻に見える「氣」字について

(4) 『九店楚簡』の「氣」字

(一) 『九店楚簡』、湖北省文物考古研究所、北京大學中文系編、中華書局、二〇〇〇年(平成二二年)五月。

(5) 『郭店楚簡』の「氣」字

『郭店楚簡』は、一九九三年(平成五年)に湖北省荊門市沙洋區郭店村の豎穴墓で出土した、戰國中期的の竹簡であ

る。出土された内容のなかで、『老子』は馬王堆帛書の甲・乙本より百年ほど前のテキストであり、馬王堆帛書や現行本との間に文字の異同がある。池田知久<sup>(三)</sup>は、「老子』の定本に、『郭店楚簡』を最も重要とすべきである」と言っている。王中江<sup>(四)</sup>も、出土文獻の中で『郭店楚簡』は重要であると言っている。『郭店楚簡』に「氣」の字は見られない。任繼愈<sup>(五)</sup>は、「𠄎」字八字を「氣」字と解釋している。「老子」甲(三五)に一字、「大一生水」(一〇)に一字、「性自命出」(二・四四)に二字、「語叢一」(四五・四八・五二・六八)に四字である。細かく見てみる。

「老子」甲(三五)には、

益生曰美、心叟𠄎曰𠄎。勿臧則老。是胃不道。

とある。任繼愈は、

益生曰祥、心使氣曰強。物壯則老。是謂不道。

と解釋している<sup>(五)</sup>。任繼愈に従い、「心使氣曰強」の解釋を檢討してみると、この用例は通行本の第五十五章に見えることが解る。『老子』の傳本は甚だ多く、成立年代も諸説あり、<sup>(六七)(七八)</sup>特定が難しい。「底本には、四部叢刊所收の宋版河上公本を用い、武内義雄博士の校定された河上公本(岩波文庫)と、馬絛倫の老子覈古によって、王弼本・傳奕本を参考にし、底本の一部を改めた」とする阿部吉雄<sup>(九)</sup>らの『老子』を見ると、

五十五章には、

益生曰祥、心使氣曰強。物壯則老。謂之不道。

生を益すは祥と曰ひ、心氣を使ふは強と曰ふ。物壯んなれば則ち老ゆ。之を不道と謂ふ。

生命を増大しようとすることは凶兆であり、心が氣を使うことは剛強である。物は、壯んであればすぐに老衰する。これを不道という。

とある。「心使氣曰強」に對し、王弼は、「心宜無有、使氣則強」と言っている。樓宇烈は、「強」、原作「彊」。「彊」、「強」の古體字。按、觀經文「物壯則老、……」、此「強」字、似當爲強壯之意」と言っている。經文の「物壯將老」は、王弼本は「物壯則老」に作っており、樓はそれに倣っている。高亨は「老子以爲自斲其精神、故有此言」と言っている。蔣錫昌は、「任氣則爲強梁也」と言っている。朱謙之は、「氣」字を范本が「炁」字に作る説を紹介した上で、「專氣致柔」、「冲氣以爲和」、皆是也。此「氣」字義亦然」言っている。『老子』には三例・三箇所「氣」が用いられているが、残りの二つは「專氣」と「冲氣」である。「專氣」は第十章に、

載營魄抱一、能無離。專氣致柔、能嬰兒。滌除玄覽、能無疵。愛民治國、能無爲。天門開闔、能爲雌。明白四達、能無知。生之畜之、生而不有、爲而不恃、長而不宰。是謂玄德。

營魄に載り一を抱ひて、能く離ること無からん。專氣柔を致し、能く嬰兒たらん。玄覽を滌除して、能く疵無からん。民を愛して國を治め、能く無爲ならん。天門開闔して、能く雌爲らん。明白四達にして、能く無知ならん。之を生じ之を畜ひ、生じて有せず、爲して恃まず、長じて宰せず。是を玄德と謂ふ。

魂を圍んでいる肉體に乗り、道を志し、これから離れることがないようにしよう。精氣を保ち身體に柔軟性を招いて嬰兒のようにならう。心を洗い清めて過誤のないようにしよう。人民を愛し無爲でありたいものだ。萬物の生滅變化に應じて雌のように従順でありたいものだ。心明らかで四方の出來事に通じていながら、愚者のようでありたいものだ。道が萬物を生じ徳が萬物を養っているが、自らが生み出しておきながら我が物とせず、自らがしておきながらその功籍を恃まず、自らが成長させておきながらそれを支配しない。こういうのを玄德という。

とある。「冲氣」は第四十二章に、

道生一、一生二、二生三、三生萬物。萬物負陰而抱陽、冲氣以爲和。

道一を生じ、一二を生じ、二三を生じ、三萬物を生ず。萬物陰を負ひて陽を抱き、冲氣以て和を爲す。

道が根本の氣を創る。根本の氣は陰陽の二氣を創る。陰陽の二氣は三番目の氣を創る。三番目の氣は全ての物を創る。全ての物は陰氣と陽氣を備え、第三の氣・湧き起る氣である冲氣で全ての物を調和する。

とある。朱の言を借りれば、ここで言う「氣」は「專氣・冲氣」と同じ意味で用いていることになる。「氣」字は、「精氣」や「湧き起る氣」と同じ意味で用いられているとしたら、「心使氣」は「ところが湧き起る力を使っている」と解釋できる。「はじめに」で、「氣」は「自然界・呼吸・身體・精神の働き」として捉えている辭であると前述したが、ここでの用例も同じであると考えられる。馬敘倫は、「專氣致柔。冲氣以爲和。皆是也。此氣字義亦然。心使氣則彊」と言っている。奥平卓らは、「私意」と言っている。石川濤は、「精氣」と言っている。齊藤响は、「心使氣曰強」の注釋に、『莊子』人間世篇を例に出し、「之を聽くに耳を以てすること無れ、而して、之を聽く心を以てせよ。之を聽く心を以てすること無れ、而して之を聽くに氣を以てせよ。氣なる者は、虚にして者を持つ者也」。心が氣を使うのは逆であつて、心が氣に冥合して、一體化して動くのが順であるという意味である」と説明している。「心」は「大徐本」である『說文解字新訂』心部に、「心、人心、土藏、在身之中。象形」とある。黄釗は、「冲氣」と同様の用いられたかたで有ることを挙げ、「和之至也」と言っている。任繼愈は、「元氣」と言っている。高明は、「心宜虚靜守柔、無思無欲、若因情而動、氣必非正、感物而欲、去靜離道、則陷入強梁、非災即禍、甚者至死」と言っている。金谷治は、「氣力」と言っている。蜂屋邦夫は、「氣持ち」と言っている。金谷・蜂屋は共に、「ここで用いている「氣」を「專氣」の反對と言っている。池田知久は、「身體の氣」と言っている。いずれも、「氣」字については解釋していない。以上のことから、ここでの用例は、解釋が少しずつ異なっているが、「身

體「や」「心」の「働き」に關聯した辭として共通していると考へる。「氣」と「老（おい）」と關聯付けていることから、「醫學」との接點が考へられる。第五十五章に見える用例と、「老子」甲（三五）に見える用例は、任繼愈に據れば變わらないことから、ここでは、ここに見える「𤝵」字を「氣」字とし、「身體の働き」や「心の働き」について用いている辭であると解釋する。

「大一生水」（一〇）には、一字、

上、𤝵也、而胃之天。道亦其志也。青昏其名。以道從事下、土也、而胃之陸。

とある。<sup>(二五)</sup>任は、

上、氣也、而謂之天。道亦其字也。請問其名。以道從事下、土也、而謂之地。

と解釋している。ここでは、「天の氣」を意味する用例と思われることから、「氣」字を「自然界の働き」として捉えている辭と解釋する。

「性自命出」（二・四四）には、二字見える。簡二には、

恚恚悵悲之𤝵、眚也。

とある。簡四四には、

目之好色、耳之樂聖、臑音之𤝵也、人不難爲之死。

とある。<sup>(二六)</sup>任は、簡二を、

喜怒哀悲之氣、性也。

と解釋し、簡四四を、

目之好色、耳之樂聲、臑音之氣也、人不難爲之死。



と解釋している。任の解釋に據れば、「氣」字は喜怒哀悲という人の感情を表した辭と用いられている。また、目や耳という人の身體と對比して用いられていることから、「身體や心の働き」として捉えている辭であると考えられる。井ノ口哲也も、「(二七) 既」字を「氣」と解釋し、簡二を「喜・怒・哀・悲の氣」と解釋し、簡四四を「(心の中で) むすばれた氣」と解釋している。丁原植も任と同様に解釋している。打越龍也は、簡二の「(二九) 既」を「氣」と解釋している。田中良明は、簡四四の「(三〇) 既」字を「氣」と解釋している。王中江も簡四四の「(三一) 既」字を「氣」と解釋している。以上のことから、ここに見える「(三二) 既」字を「氣」とする。また、ここに用いられている用例は「心の働き」に關聯した辭であると解釋する。

「語叢一」(四五・四八・五二・六八)にある四字を見てみる。簡四五から簡四八には、凡又血既者、膚又恚又惹、又脊有慙。其豐又容又頤、又聖又臭又未、又既又志。とあり、任は、

凡有血氣者、皆有喜有怒、有慎有慙。其體有容有色、有聲又嗅有味、有氣有志と解釋している。また、簡五二には、

既、容設也。志設也。

とあり、同じく任は、

氣、容設也。志設也

と解釋し、簡六八にある

辨天道以憐民既。

を、

辨天道以化民氣。

と解釋している。簡四五から簡四八にある「𦣻」字を「氣」字とすれば、そのうちの一つは、「血氣」と解釋できる。「血氣」は、『國語』・『論語』・『墨子』・『列子』・『莊子』・『荀子』・『韓非子』・『春秋左氏傳』・『周禮』・『禮記』・『管子』・『呂氏春秋』・『淮南子』に四十八箇所見え、「呼吸の働き」、「身體の働き」や「心の働き」に關聯した辭として用いられている。ここでは、喜怒哀懼という精神に關與した辭と用いられていることから、「氣」字は同様の意味であると考える。簡五二にある用例の意味は良く解らないが、「志」と用いられており、「心」に關與した辭ではないかと思われる。簡六八にある用例の意味も良く解らないが、「民氣」は『呂氏春秋』・『淮南子』に見える用語と同じであり、『墨子』節用中第二十一篇に見える「民之氣」と同様の用語である。「民之氣」では、「身體」や「心」の働きに關聯した辭として用いられていることから、同様の用いられ方をしていないかと推測する。以上のことから、「𦣻」字を「氣」と解釋する立場に據れば、『郭店楚簡』に見える「氣」字は、いままで検討してきた古典籍と類似した用いられ方をしていると言える。

注

3. 出土文献に見える「氣」字について

(5) 『郭店楚簡』の「氣」字

(一) 『簡牘名蹟選3 湖北編(一)』、西林昭一責任編集、二玄社、二〇〇九年(平成二二年)四月、七〇頁。

(二) 『大東文化大學漢學會誌』第五十一號 池田教授三浦教授退休記念號、大東文化大學漢學會、二〇一二年

(平成二四年)三月十日、二頁。

(三) 北京大學哲學系教授。一九五七年生まれ。專攻は中國思想史。二〇一一年(平成二十三年)一〇月二十九日に東京大學で行われた「中國社會文化學會・東方學會共催講演會」の中で、「中國出土文獻と古代思想世界の新發見」と題し講演した際に言及。

(四) 『郭店楚墓竹簡』、荊門市博物館編、文物出版社、一九九八年(平成一〇年)五月。

(五) 『郭店楚墓竹簡』、荊門市博物館編、文物出版社、一九九八年(平成一〇年)五月、一一三頁。

(六) 『老莊思想』、池田知久著、財團法人放送大學教育振興會、一九九六年(平成八年)三月、五九〜七二頁。

(七) 『老子』、馬王堆出土文獻譯注叢書編集委員會編、池田知久著、東方書店、二〇〇六年(平成一八年)七月、四三六〜四六三頁。

(八) 『老子』、阿部吉雄・山本敏夫・市川安司・遠藤哲夫著、明治書院、一九六六年(昭和四一年)一月。

(九) 『老子』、齊藤响著、集英社、一九七九年(昭和五四年)一月、一一〜三三頁。

(一〇) 『老子』、阿部吉雄・山本敏夫・市川安司・遠藤哲夫著、明治書院、一九六六年(昭和四一年)一月、三〜一〇頁。

(一一) 『老子道德經注校釋』、魏・王弼注、樓宇烈校釋、中華書局、二〇〇八年(平成二〇年)十二月、一四六〜一四七頁。

(一二) 『民國叢書』第5編5、上海書店、開明書店影印本。『老子正詁』、高亨、一一八頁。

(一三) 『民國叢書』第5編5、上海書店、商務印書館一九三七年影印本。『老子校詁』、蔣錫昌、三四二〜三四三頁。

(一四) 『老子校釋』、朱謙之撰、中華書局、一九八四年(昭和五九年)一月、二三四〜二三五頁。

- (二五) 『老子校註』、馬敘倫著、古籍出版社、一九五六年(昭和三十三年)七月、一二九頁。
- (二六) 『老子・列子』中國の思想6、松枝茂夫・竹内好監修、奥平卓・大村益夫譯、一九六四年(昭和三十三年)十二月、一〇五～一〇六頁。
- (二七) 『老子真義』、石川溱著、共立社、一九七三年(昭和四十八年)五月、一六六～一六七頁。
- (二八) 『老子』、齊藤响著、集英社、一九七九年(昭和五十四年)十一月、一七五～一七七頁。
- (二九) 『帛書老子校注析』、黃釗著、臺灣學生書局、一九九一年(平成三年)一〇月、二九三～二九九頁。
- (三〇) 『老子譯注』、任繼愈著、坂出祥伸・武田秀夫譯、東方書店、一九九四年(平成六年)九月、一六四～一六六頁。
- (三一) 『帛書老子校注』、高明撰、中華書局、一九九六年(平成八年)五月、八九～九八頁。
- (三二) 『老子』、金谷治著、講談社、一九九七年(平成九年)四月、一七一～一七三頁。
- (三三) 『老子』、蜂矢邦夫譯注、岩波文庫、二〇〇八年(平成二〇年)十二月、二五一～二五五頁。
- (三四) 『老子』、池田知久著、東方書店、二〇〇六年(平成一八年)七月、六八～七二頁。
- (三五) 『郭店楚墓竹簡』、荊門市博物館編、文物出版社、一九九八年(平成一〇年)五月、一二五頁。
- (三六) 『郭店楚墓竹簡』、荊門市博物館編、文物出版社、一九九八年(平成一〇年)五月、一七九～一八〇頁。
- (三七) 『郭店楚簡の思想史的研究』第二卷、井ノ口哲也譯注、東京大學郭店楚簡研究會編、一九九九年十二月、一六～二四頁。
- (三八) 『郭店楚簡』、丁原植著、臺灣古籍出版、二〇〇〇年十二月、一六～二二、九一～九三、三三三、三五四頁。
- (三九) 『郭店楚簡の研究』(四)、池田知久監修、大東文化大學郭店楚簡研究班、二〇〇二年(平成一四年)

一〇月、二二頁。

〔三三〇〕『郭店楚簡の研究』（五）、池田知久監修、大東文化大學郭店楚簡研究班、二〇〇四年（平成一六年）三月、一〇九頁。

〔三三一〕「中國出土文獻と古代思想世界の新発見」、王中江著、二〇一一年（平成二三年）一〇月二九日講演會レジュメ、九頁。

〔三三二〕『郭店楚墓竹簡』、荊門市博物館編、文物出版社、一九九八年（平成一〇年）五月、一九五～一九六頁。

#### 〔6〕『上海博物館藏戰國楚竹書』の「氣」字

『上海博物館藏戰國楚竹書』という出土資料は、一九九四年、香港の古玩市場において発見されたという経緯が伴っており、本来公表されるべき出土した土地・年代、その他の状況が今日に至るまで不明・未公表のままとなっている。しかしながら、池田らはこの「中に含まれる諸資料の成書年代は、資料によって一つ一つ異なっている<sup>(1)</sup>」のであるうけども、その抄寫の年代と地點は、ほぼ同一のまたは接近した年代と地點と考えられる。」とした上で、馬承源主編『上海博物館藏戰國楚竹書』の前言に觸れ、「故馬承源「前言」は『上海博楚簡』の竹簡の標本の科學的測量に基づいて、標本の年代を「戰國晚期」に在ると述べ、また、種々の情況の推斷と『郭店楚簡』との比較に基づいて、『上海博楚簡』の竹簡は楚國が郢より遷都する以前に、貴族の墓中に埋められた隨葬品であると認めている。」という點に疑義が在るとしながらも、この諸資料を検討することによって説得力のある解答を導きたいと言っていることから、『上海博物館藏戰國楚竹書』が、具體的かつ實證的検討文獻の對象であると考ええる。

二〇〇八年（平成二〇年）までに刊行された七冊の中に、「氣」字は見えない。馬承源らは、「气」一字、「氣」

一字、「𩇛」十四字、「𩇛」一字、「𩇛」一字を「氣」と解釋している。「𩇛」十四字のうち、第七分冊では「既」一字を「𩇛」と読み替えて「氣」と解釋している。それらは、第一分冊に二字、第二分冊に六字、第三分冊に九字、第七分冊に二字、計十九字見える。尚、『上海博物館藏戰國楚竹書』第八分冊は、今回入手できなかったため、調査の體象外とした。

第一分冊には、「性情論」に「氣」と「𩇛」が各一字見える。第一簡に「愬惹哀悲之氣、𩇛也」とある。濮茅左は「喜怒哀悲之氣、性也」と解釋している。この用例は、『郭店楚簡』「性自命出」簡二に見える「愬惹依悲之𩇛、𩇛也」と同じ用例である。任繼愈らは、簡二を「喜怒哀悲之氣、性也」と解釋している。平岡禎吉は、「氣」、「𩇛」、「氣」、「氣」の字の成立年代は晚周六國の字である」とし、特に「氣」の字は紀元前三七六年或は三〇五年頃の製作と推定した上で、「この頃には、氣の下に多くの字を組み合わせて用いられ、氣の字もおそらくその前後に使用され来たものである。吉金文存に見える氣の字は、文義よりして殆ど同義に用いられている」と述べている。現在、氣の中に文字を組合せたとと思われるものは、氣・氤・氣・氣・氣・氣・氣・氣・氣・氣・氣・氣・氤等々その数は多い。「氣」に關聯した字は、『漢語大詞典』には二十一字、『大漢和辭典』には四十一字、『中文大辭典』には四十二字收載されている。「氣」の字については前川捷三も言及しており、『吉金文存』の銘文に對する陳夢家の説を引用し、「氣はおそらく氣という聲符と火という意符から成り、氣はまた聲符でもある文字で、氣とほぼ同じと見なしてよいであろう」と言っている。「氣」と「氣」がこの頃より同義に用いられていたであろうことを、平岡禎吉は「氣が氣に替わったことは、氣が神靈的、祭祀的な古い觀念から、飲食的肉體的なものに變化したことを示すので、一段と現實化し、人間的なものに移行したもの、と言えよう」と評している。これらに従い、ここに見える「氣」を「氣」と解釋すると、この用例は、「心」に關與した辭ではないかと考

えられる。第三十六簡には「昏岱之𦵏也」とある。この用例で、濮茅左は「昏岱」を「待考」としている。文字が特定されていないため、これ以上の検討は避ける。

第二分冊には、「民之父母」に「𦵏」二字「𦵏」一字見える。第十簡に「亡聖之樂、𦵏志不愬」とある。濮茅左は「無聲之樂、氣志不違」と解釋し、「氣志」を「指精神、意志」と言っている。「氣志」は、『呂氏春秋』・「淮南子」に見え、「心の働き」に關聯した用語である。第十二簡に「亡聖之樂、𦵏」とある。濮茅左は「無聲之樂、氣志既從」と解釋している。また、第十三簡に「亡聖之樂、𦵏志既從」とあり、濮茅左は「無聲之樂、氣志既從」と解釋している。濮茅左の解釋に據れば、この句は、『禮記』孔子閒居にある「無聲之樂、氣志既從」と同じである。『禮記』孔子閒居篇に見える「氣志」は、「呼吸の働き」、「身體の働き」や「心の働き」に關聯した辭として用いられていることから、第十二簡・第十三簡は同様の意味で用いられているのではないかと思われる。「民之父母」に見える「𦵏」・「𦵏」一字は、「氣」字と同じ用いられ方であると考えられる。「從政（甲篇）」に「𦵏」字が一字見える。第九簡に「志𦵏不旨」とある。張光裕は「志氣不旨」と解釋している。張光裕の解釋に據り「志氣」とすれば、「志氣」は、主要な古典籍の中で『墨子』・『莊子』・『呂氏春秋』・『淮南子』に見える用語である。「從政（甲篇）」に見える「志氣」の用いられ方を特定できないが、頻回に用いられている用語であることから、同様の用例ではないかと推測できる。「容成氏」に「𦵏」一字「𦵏」一字見える。第二十九簡に「ㄱ舎易之𦵏」とある。曹峰・李承律は、「𦵏」を圖版より「𦵏」に作るが「氣」と解釋している。李零・邱德修は「辨陰陽之氣」と解釋している。彼らの解釋に據れば、「陰陽之氣」は既に『列子』・『周禮』に見える用語で、「自然界の働き」として捉えている辭である。第三十簡には「天地之𦵏」とある。曹峰・李承律は、第二十九簡同様「𦵏」を圖版により「𦵏」に作るが「氣」と解釋している。李零は「天地之氣」と解釋している。彼らに據り「氣」と解釋すれば、「天地之氣」は『呂

氏春秋』に見える用語である。『呂氏春秋』では、「自然界の働き」として捉えている辭である。第二十九簡・第三十簡は、ともに「既」を「氣」と解釋すれば、「自然界の働き」として捉えている辭と類似の用語であると考えることができる。

第三分冊には、「周易」に「氣」一字見える。第四十四簡に「氣至、亦母變、羸其瓶、凶」とある。漢茅左は「汔至、亦母縮其、羸其瓶、凶」と解釋している。元勇準は第四十四簡に見える字を「氣至、亦母變、羸其瓶、凶」とし、「汔至、亦母縮其、羸其瓶、凶」と解釋している。いずれも、「氣」字として解釋していない。ここでは、これに従う。「互先」に「既」八字見える。第一簡に、「又或焉又 = 既 = 焉又 = 又 = 焉又 = 訶 = 焉又違者」とある。李零は「有或焉有氣、有氣焉有有、有有焉有始有始焉有往者」と解釋し、「有」は「可能即指天地萬物」と言っている。第二簡に、「既是自生、互莫生既 = 是自生自爻。互既之」と三文字「既」字が見える。李零は「氣是自生、互莫生氣。氣是自生自作。互氣之」と解釋している。第四簡に、「生之生行、厓既生、清既生天。既清神才、云 = 相生」と三文字「既」字が見える。李零は「生之生行、濁氣生地、清氣生天。氣清神哉、云云相生」と解釋している。「清氣生天」とは、『淮南子』天文訓篇に見える語句である。第九簡に、「互既之生、因」とある。李零は「互氣之生、因」と解釋している。第二簡と同じ用例である。「互先」に見える「既」字は、「氣」と解釋すれば、天地萬物や自然と關聯した用い方をしていると考えられる。「氣」は、「自然界の働き」として捉えている辭であろう。

第七分冊には、「凡物流形(甲本)」に「既」一字「既」一字見える。第四簡に「五既並至」とある。曹錦炎は「五既並至」と解釋している。曹は、「既」は「既」と讀むことが出来るとし、「氣」と同じであると言っている。また、「五既」は「五行之氣」であるとしている。これに據れば、従前の書に同じ用語が見える。第二十七簡に「并既而言」とある。曹は「屏氣而言」と解釋している。曹に據れば、「屏氣」は『論語』決黨篇に見える用語



である。底本を『重葉宋本論語注疏』として決黨篇にある「屏氣」を見てみると、

攝齊升堂、鞠躬如也。屏氣似不息者。出降一等、遲顏色怡怡如也。沒階、趨進翼如也。復其位、蹶踏如也。

齊もすそを攝つかげて堂を升るに、鞠躬まきしんこう如也。屏氣して息せざる者に似たり。出て一等を降れば、顔色を違はなちて怡怡如也。階を沒つせば、趨はしに進むこと翼如也。其の位に復かへれば、蹶踏しゅうた如也。

裾を持ち上げて堂に上るときは、腰をかがめる。息を殺していてまるで息をしない者のようである。退出して一段降りると、表情が和やかになり、晴れやかになる。階段を降りつくして、小走りに自分の席へ進むときは兩裾を翼のように廣げる。自分の身分の席に戻ると、つつしみ深くしている。

とある。「屏氣」に對し、何晏・皇侃は、何も述べていない。刑昺（二七）は、「則屏藏其氣、以無氣息者也」と言っている。朱熹（二八）は、「氣、容肅也」と言っている。康有爲（二九）は、「屏、藏除也。息、鼻息出入也。今至尊、氣、容肅也。不息、有吸無呼也」と言っている。劉寶楠（三〇）は、「自卽鼻也。夫子屏攝其氣。若呼吸俱泯蓋、氣、容肅也」と言っている。程樹德（三一）は、「但、見屏氣似不息而曰」と朱熹の言等を選定している。吉田賢抗（三二）は、「屏氣「屏」は藏で、息づかいを殺すこと」と言っている。金谷治（三三）は、「まるで息をしないもののように息づかいをひそめられた」と解釋している。久米旺生（三四）は、「呼吸がとまったかのように」と言っている。平岡武夫（三五）は、「屏氣似不息者」に對し、「屏」は藏。息をはずめる」と言っている。宇野哲人（三六）は、「いきをこらすこと」と言っている。加地伸行（三七）は、「息をひそめ、ほとんど息をされない感じであった」と解釋している。王文格（三八）は、「抑制呼吸不敢出聲」と言っている。黄克劍（三九）は、「屏住気像是没有了呼吸」と言っている。呼吸を制御する意識を働かせている用例であることから、『論語』では、「屏氣」は「心」に關係した用例であり、「呼吸の働き」や「心の働き」を意味している辭である。しかしながら、第二十七簡は前後の文章が不明のため、「并𦣳」を「屏氣」と解釋しても、主要な古典籍と同じ用語があるとしたか論

じることができない。

以上のことから、『上海博物館藏戰國楚竹書』に見える氣の意義は、文字の考釋を基本的に馬承源らに従う立場で検討するならば、主要な古典籍に見える用語と概ね類似した用いられ方をしている用語が多いと言える。

### 注

3. 出土文獻に見える「氣」字について

(6) 『上海博物館藏戰國楚竹書』の「氣」字

(一) 『上海博楚簡の研究』(一)、池田知久監修、大東文化大學上海博楚簡研究班編、二〇〇七年(平成一九年)三月、三〜四頁。

(二) 『上海博物館藏戰國楚竹書』(一)、馬承源主編、上海古籍出版社、二〇〇一年(平成一三年)十一月、二二〇〜二二二頁。

(三) 『淮南子に現れた 氣の研究』、平岡禎吉著、理想社、一九六八年(昭和四三年)一〇月改訂、三五七〜三五八頁。

(四) 『漢語大詞典』、漢語大詞典編輯委員會編、漢語大詞典出版社、一九九四年(平成六年)四月、六卷一〇二〜一〇三八頁。

(五) 『大漢和辭典』、諸橋徹次著、大修館書店刊、一九八六年(昭和六一年)修訂版、六卷八四五〜八五三頁。

(六) 『中文大辭典』、中文大辭典編纂委員會、中國文化大學出版部、中華民國八十二年九版、五卷八一六〜八三一頁。

- (七) 『氣の思想 中國における自然觀と人間觀の展開』、小野澤精一・福永光司・山井湧編、東京大學出版會、一九七八年(昭和五三年)三月、一六～一七頁。
- (八) 『淮南子に現れた 氣の研究』、平岡禎吉著、理想社、一九六八年(昭和四三年)一〇月改訂、三五八頁。
- (九) 『上海博物館藏戰國楚竹書』(一)、馬承源主編、上海古籍出版社、二〇〇一年(平成一三年)一月、二七一～二七二頁。
- (一〇) 『上海博物館藏戰國楚竹書』(二)、馬承源主編、上海古籍出版社、二〇〇二年(平成一四年)一月、一六九～一七〇頁。
- (一一) 『上海博物館藏戰國楚竹書』(二)、馬承源主編、上海古籍出版社、二〇〇二年(平成一四年)一月、一七二～一七三頁。
- (一二) 『上海博物館藏戰國楚竹書』(二)、馬承源主編、上海古籍出版社、二〇〇二年(平成一四年)一月、一七三～一七四頁。
- (一三) 『上海博物館藏戰國楚竹書』(二)、馬承源主編、上海古籍出版社、二〇〇二年(平成一四年)一月、二二三頁。
- (一四) 『上海博物館藏戰國楚竹書』『昔者君老』『容成氏』(上) 譯注、曹峰・李承律著、上海博楚簡研究會編、東京大學文學部東洋史學研究室、二〇〇五年(平成一七年)一月、一七三頁。
- (一五) 『上海博物館藏戰國楚竹書』(二)、馬承源主編、上海古籍出版社、二〇〇二年(平成一四年)一月、二七二～二七三頁。
- (一六) 『上博楚簡(容成氏) 注釋考證』、邱德修著、臺灣古籍出版、二〇〇三年(平成一五年)一月、

四五五頁。

(二七) 『上海博物館藏戰國楚竹書《昔者君老》』、『容成氏』(上) 譯注、曹峰・李承律著、上海博楚簡研究會編、東京大學文學部東洋史學研究室、二〇〇五年(平成一七年) 一二月、一七五頁。

(二八) 『上博楚簡《容成氏》注釋考證』、邱德修著、臺灣古籍出版、二〇〇三年(平成一五年) 一〇月、四六二頁。

(二九) 『上海博物館藏戰國楚竹書』(三)、馬承源主編、上海古籍出版社、二〇〇三年(平成一五年) 一二月、二七三～二七四頁。

(三〇) 『上海博楚簡の研究』(四)、池田知久監修、大東文化大學上海博楚簡研究班編、二〇一〇年(平成二二年) 三月、一九一～一九二頁。

(三一) 『上海博物館藏戰國楚竹書』(三)、馬承源主編、上海古籍出版社、二〇〇三年(平成一五年) 一二月、二八八～二八九頁。

(三二) 『上海博物館藏戰國楚竹書』(三)、馬承源主編、上海古籍出版社、二〇〇三年(平成一五年) 一二月、二八九頁。

(三三) 『上海博物館藏戰國楚竹書』(三)、馬承源主編、上海古籍出版社、二〇〇三年(平成一五年) 一二月、二九一～二九二頁。

(三四) 『上海博物館藏戰國楚竹書』(三)、馬承源主編、上海古籍出版社、二〇〇三年(平成一五年) 一二月、二九五～二九六頁。

(三五) 『上海博物館藏戰國楚竹書』(七)、馬承源主編、上海古籍出版社、二〇〇八年(平成二〇年) 一二月、

二二二〇～二二二二頁。

(二六) 『上海博物館藏戰國楚竹書』(七)、馬承源主編、上海古籍出版社、二〇〇八年(平成二〇年)一二月、二六八～二六九頁。

(二七) 『重刊宋本論語注疏』、何晏集解、邢昺疏、邢昺(九三二～一〇一〇)は、北宋の學者。語疏卷十・三葉。

(二八) 『論語集註』「阮元本」、南宋の學者朱熹(一一三〇～一二〇〇)の著。論語五・十一葉表に「攝擷也。

齊、衣下縫也。禮、將升堂。兩手摳衣。使去地尺。恐躡之而傾跌失容也。屏、藏也。息、鼻息出入者也。近至尊。氣容肅也」とある。

(二九) 『儒藏』、季羨林名譽總編纂、湯一界・龐樸・孫欽善・安平秋總編纂、北京大學出版社、二〇〇五年(平成一七年)八月、『論語注』一五六～一五七頁、康有爲(一八五八～一九二七)は、晚清の今文經

學者。『論語注』の著者。

(三〇) 『論語正義』、劉寶楠撰、卷十三・三～四葉。

(三一) 『論語集釋』(二)、程樹德撰、中華書局、一九九〇年八月、六五一～六五四頁。

(三二) 『論語』、吉田賢抗著、明治書院、一九六〇年(昭和三五年)一二月、二二六頁。

(三三) 『論語』、金谷治譯注、岩波文庫、一九六三年(昭和三八年)七月、一三一頁。

(三四) 『論語』、久米旺生<sup>ふか</sup>著、圖書印刷、一九六五年(昭和四〇年)五月、一五二頁。

(三五) 『論語』、平岡武夫著、集英社、一九八〇年(昭和五五年)五月、二六六頁。

(三六) 『論語新釋』、宇野哲人著、講談社、一九八〇年(昭和五五年)一月、二七八～二七九頁。

(三七) 『論語』、加地伸行全譯注、講談社、二〇〇四年(平成一六年)三月、二一九頁。

(三三) 『四書語言分析』所收「論語語言分析」、王文格編著、四川大學出版社、二〇〇九年(平成二二年)五月、一二五頁。

(三九) 『論語疏解』、黃克劍撰、中國人民大學出版社、二〇一〇年(平成二二年)四月、一九九〜二〇〇頁。

(7) 『睡虎地秦簡』の「氣」字

『睡虎地秦簡』は、一九七五年(昭和五〇年)に湖北省雲夢縣睡虎地で、戰國末から秦の墓葬十二墓が發掘され、そのうちの十一號墓の木棺内から出土した紀元前二二七年頃の竹簡である。秦代の法律・政治・社會を知る同時資料として重視されている。<sup>(三)</sup> 『睡虎地秦簡』に「氣」字は見あたら<sup>(三)</sup>ない。張守中は、「法律答問釋文注釋」中に見える「乞」字二字を「气」の字に解釋している。用例はいずれも「乞鞠」である。「气」と「乞」を同じとする記載は多々見られ、黒田源次や白川靜は「气」と「乞」の關係に言及している。しかし、二人の意見は推測の域を出ておらず、「气」字が「乞」と同じであると解釋して良いかは疑問である。ここでの用例は、此まで検討してきた「氣」・「气」に通ずる解釋は出来ない<sup>(三)</sup>と考える。

注

3. 出土文獻に見える「氣」字について

(7) 『睡虎地秦簡』の「氣」字

- (一) 『簡牘名蹟選4 湖北編(二)』、西林昭一責任編集、二五社、二〇〇九年(平成二二年)七月、七〇頁。
- (二) 『睡虎地秦簡文字編』、張守中撰集、文物出版社、一九九四年(平成六年)二月、四頁。

(三) 『睡虎地秦墓竹簡』、睡虎地秦墓竹簡整理小組編、文物出版社、一九九〇年(平成二年)九月、一二〇～一二二頁。図版一一五。

(四) 『氣の研究』、黒田源次著、東京美術、一九七八年(昭和五三年)七月、一七～一八頁。

(五) 『字統』、白川靜著、平凡社、一九八四年(昭和五九年)、一六六頁。

(8) 『龍崗秦簡』の「氣」字

『龍崗秦簡』は、一九八九年(平成元年)から一九九一年(平成三年)に湖北省雲夢縣南郊の龍崗村から出土された、秦・始皇帝初期の簡牘である。用字などから推して睡虎地簡より少し前と推定されている。『龍崗秦簡』に「氣」字は見あたらぬ。

注

3. 出土文獻に見える「氣」字について

(8) 『龍崗秦簡』の「氣」字

(一) 『簡牘名蹟選4 湖北編(二)』、西林昭一責任編集、二玄社、二〇〇九年(平成二二年)七月、七一頁。

(二) 『龍崗秦簡』、湖北省文物考古研究所、北京大學中文系編、中華書局、二〇〇一年(平成一三年)八月。

(9) 『湖南大學嶽麓書院藏秦簡』の「氣」字

『湖南大學嶽麓書院藏秦簡(壹)』の前言に、次のようにある。「二〇〇七年十二月、湖南大學嶽麓書院は、香港

の骨董市場に流出していた秦簡を緊急保存する目的で購入した。竹簡は、香港から嶽麓書院まで、サランラップにくるまれ、大小八つの箱に分割されて運ばれた。これらの竹簡の總数は二千百枚であり、中でも比較的整っている簡（完整簡）は一千三百枚餘りであった。この他、二〇〇八年八月には、香港の收藏家が全七十六枚の竹簡（完整簡は三十枚餘り）を無償で嶽麓書院に寄贈した。そのため、嶽麓書院藏秦簡（略して、嶽麓秦簡と稱する）は、總計二千百七十六枚となった<sup>(11)</sup>。嶽麓書院が購入した竹簡と、收藏家が寄贈した竹簡は、形制や書體・内容などが非常に類似しており、同一の出土簡であろうと考えられていること<sup>(12)</sup>から、文献としての價値は高いと見られている。

この秦簡は、主に七つに大類されるが、その中の「占夢書」に、「氣」字が二字見える。一正に「變氣不占」とあり、一六正に「夢一臘五變氣、不占」とある。何れも「變氣」とある。「變氣」は、『韓非子』に見える用語である。『韓非子』では、天地自然の變化に對する「働き」として用いられているが、ここでは「氣」が夢に關係する辭として用いられていることから、「人體の働き」に關する用例と考えられ、主要な古典籍に見える「氣」の用例と類似した用語であると思われる。

尚、今まで見てきた出土資料の中で、「氣」字が見えたのは初めてである。楚簡には「氣」字が無く、秦簡に見えることは、とても興味深い事實である。

## 注

3. 出土文献に見える「氣」字について

(9) 『湖南大學嶽麓書院藏秦簡』の「氣」字

(11) 『湖南大學嶽麓書院藏秦簡（壹）』、朱漢民、陳松長、上海辭書、二〇一〇年（平成二二年）一二月、前言。



(11) 『中國出土文獻研究會』ホームページ <http://www.shutudo.org/newmaterial/gakuroku-material> を参照。

二〇一三年七月四日。

### (10) 『馬王堆漢墓帛書』の「氣」字

『馬王堆漢墓帛書』は、一九七三年（昭和四八年）一二月に、湖南省長沙の馬王堆三號漢墓から出土した資料で、絹布に文字を記した大量の帛書を言う。出土した帛書の文字は、總計十二萬字に及ぶ。二種の『老子』、『經法』、『十六經』、『稱』、『道原』、『五行』、『九主』、『明君』、『德聖』、『易』、『五星占』、『天文氣象雜占』等、その資料は膨大である。その中で、眞柳誠が、『馬王堆漢墓帛書（肆）』の書評で「一九七二年四月、中國湖南省長沙市の東郊外約四kmの地點・馬王堆の臺地より發掘された二一〇〇年以上昔の未腐亂女性屍體は、當時その奇跡が世界に與えた衝撃とともに今も我々の記憶に新しい。そして翌一九七三年十二月、第一號・二號に續き發掘された第三號漢墓より出土した二四種に上る多量の帛書・木竹簡等の古文獻は、その後の古代中國史研究に計り知れぬほどの貴重な資料を斯界に提供することとなった。かつそれらの少なからぬ部分が醫學關係文獻であつたことは、傳承文獻では漢代はおろか六朝時代すら正確に遡ることが極めて困難であつた中國醫學の史的研究にとって、まさしく驚異的出來事であつた」と言っているように、『足臂十一脉灸經』、『陰陽十一脉灸經』（甲本・乙本）、『脉法』、『陰陽脉死候』、『五十二病方』、『却穀食氣』、『導引圖』、『養生法』、『雜療方』、『胎產書』と言う大量の帛書が發見されたことは、他の出土資料と比較して、特徴的なことと思われる。「氣」字は、「醫學」との関係が密接であると思われることから、大量にある『馬王堆漢墓帛書』資料の中から帛書の古醫書に絞つて「氣」字を見てみることにする。圖版の釋文は、基本的に『馬王堆漢墓帛書（肆）』に従う。十一種の古醫書を検討した結果、「氣」字は、四十箇所に

見える。細かく見ると、

『足臂十一脉灸經』に、「氣」字は無い。

『陰陽十一脉灸經』（甲本）は、「氣」字が三箇所見える。内譯は、「氣」字が二箇所、「上氣」が一箇所である。「上氣」は『周禮』に見える用語である。

『陰陽十一脉灸經』（乙本）は、「氣」字が二箇所見える。内譯は、「氣」字が二箇所である。

『脉法』は、「氣」字が二箇所に見える。

『陰陽脉死候』は、「氣」字が三箇所見える。内譯は、「氣」字一箇所の他、「天氣」、「地氣」が各一箇所である。

『天氣』は、『莊子』・『禮記』・『管子』・『呂氏春秋』・『淮南子』に見え、「地氣」は、『列子』・『莊子』・『周禮』・『禮記』・『管子』・『呂氏春秋』・『淮南子』に見える用語である。雙方とも、「氣」は、「自然界の働き」として捉えている辞である。

『五十二病方』は、「氣」字が三箇所見える。内譯は、「氣」字が二箇所、「氣睢」が一箇所である。「氣睢」は、今までのどの書物にも見られない用語である。

『却穀食氣』は、「氣」字が四箇所に見える。一箇所は缺字があり「氣」の用例は不明であるが、他は「亂氣」が一箇所、「夏氣」が一箇所、「失氣」が一箇所である。「亂氣」は、『春秋左氏傳』に見え、「失氣」は、『荀子』・『淮南子』に見える用語である。「春秋左氏傳」では、「亂氣」は「呼吸の働き」、「身體の働き」や「心の働き」に關連した辞として用いられている。「荀子」・『淮南子』では、「失氣」は「身體の働き」や「心の働き」に關連した辞として用いられている。「夏氣」は、今までの書物に見えない用語であるが、『呂氏春秋』・『淮南子』に「春氣」・「秋氣」とあり、季節の辞を用いた「自然界の働き」として捉えている辞である。

『導引圖』題記に、「氣」字は無い。

『養生方』は、「氣」字が十九箇所に見える。内譯は、「氣」が十一箇所、「益氣」が四箇所、「少氣」、「多氣」、「惡氣」、「良氣」が各一箇所である。『長沙馬王堆醫書研究專刊』第二輯（一九八一年）に掲載された周世榮の釋文に據ると、「氣」字は七十三箇所に見える。内譯は、「氣」二十一箇所、「治氣」八箇所、「氣血」五箇所、「神氣」・「新氣」が各四箇所、「竣氣」・「翁氣」が各三箇所、「陰氣」・「人氣」・「宿氣」が各二箇所、「合氣」・「音氣」・「民氣」・「天氣」・「地氣」・「隙氣」・「血氣」・「生氣」・「精氣」・「氣刑」・「秋氣」・「和氣」・「氣亂」・「竊氣」・「通氣」・「積氣」・「致氣」・「朝氣」が各一箇所である。『養生方』は、秦漢の養生術房中術を傳える唯一の資料と考えられているが、釋文そのものに疑義が多いとされている。馬王堆漢墓帛書整理小組編に従って考えてみるに、「少氣」・「多氣」・「良氣」は、初めて見える用語であるが、「惡氣」は『管子』・『呂氏春秋』に見える用語であることから、他の「氣」字も同様の用いられ方をしていると考えて良いのではないかと思われるが、現時點で確かな根拠を示すことは難しいと思われる。

『雜療方』は、「氣」字が一箇所、「益氣」と見える。「益」は、「大徐本」である『說文解字新訂』皿部に「饒也。从水、皿。皿、益之意也」とある。「益」の字も食器に係した辭であり、「氣」字は『說文解字』米部に「饋客芻米也」とあることから、食事に關聯した辭であると思われる。「益氣」の上の字は缺損しているため、これ以上検討出来ないが、いままで見てきた用語と大きく異ならないのではないかと考える。

『胎產書』は、「氣」字が三箇所見える。内譯は、「氣」字が二箇所、「養氣」が一箇所である。「養氣」は、『禮記』に見える用語である。『禮記』では、「養氣」は「自然界の働き」として捉えている辭である。

以上のことから、『五十二病方』以外は、既存の古典籍に見える用語が多く、「氣」字の用いられ方は概ね同じ

ではないかと思われる。『五十二病方』は、五十二の病名について記載されている内容であると考えられているが、今までのどの書物にも見られない用語である「氣雉」が含まれている。そこで、『五十二病方』の「氣」字を検討する。

『五十二病方』には、「氣」字の用例が三箇所見える。篇名は、馬王堆の最新研究を行っている「馬王堆出土文獻譯注編集委員會」の委員である小曾戸洋らが書き著した『五十二病方』に據ると、蜺篇に、

一、以青梁米爲鬻。水十五而米一、成鬻五斗。出、揚去氣。盛以新瓦甕、冥口以布三寸即封塗厚二寸、燔令泥。盡火而歎之、瘠已。

別方、青梁米で粥を作る。水を十五に米を一の割合で、五斗の粥を作る。出来たら、火から外して湯氣を取り去る。新しい素焼きのかめに盛り、口を三寸の布で覆いすぐに厚さ二寸に塗り込め、火であぶって封をする。火が盡きしてからこれをすすれば、傷が治る。

とある。山田慶兒は、「氣」を「湯氣」と言っている。馬繼興は、「粥的氣蒸發散盡」と言っている。嚴健民は、「水蒸汽」と言っている。小曾戸らも「湯氣」と解釋している。「氣」の原義に「蒸氣」とあるが、ここでは米より粥を造り出す過程について記載されていることから、「湯氣」と解釋することが妥当であると考ええる。「火」鬺篇に、

一、取秋竹、者之、而以氣熏其瘡、已。

別方、秋の竹を取って、之を煮て、そうして蒸氣でその傷痕をいぶせば、治る。

とある。山田は、「蒸氣」と言っている。馬は、「熱氣」と言っている。嚴は、「熱蒸氣」と言っている。小曾戸らは「氣」を「蒸氣」と解釋している。「火」鬺篇では、やけどの傷に對する處置法が記載されている。米と人の乳を混ぜたものや酒を用いるなど様々な用法が記載されている。ここの用例はそれらの一つであると考えられる。傷

痕をいぶす方法は他にも見えることから、ここで「蒸氣」を用いていぶすと言う解釋に問題がないと思われる。以上の二用例は、藤堂らが考證した「氣」と同じである。氣睢篇に、

一、氣睢始發、溼溼以痒、如□狀、搗靡□而□□三抃、細切、淳酒、一斗□□二果、令諫叔□  
鑿可□、以酒沃、即浚□□即浚而□之、溫衣□□出而止。

別方、はじめて氣睢が發症すると、ずきんずきんと痒し、……のような状態である。……を白で搗いてすりつぶし……小さい束三つを、細かく切つて、濃い酒一斗で……、……二個を……、諫叔（植  
物名と思われるが不詳）を……熬可……、酒を注ぎ、すぐにさらえてそれを……、温かい衣服……  
出たら治る。

とある。山田・馬・嚴・小曾戸らは、共に「氣睢」を「氣疽」と解釋している。馬繼興・嚴健民は、「氣睢」を「古病名」と言っている。睢病篇では、「睢始起、取箇牢漬醢中、以尉其種處」とあり、「初めて睢が發症したら、商陸を酢の中に浸して、それで腫れている部分を熨す」とあることから、「睢」は「はれもの」に關する辭であると思われる。山田・馬・嚴・小曾戸らが言う「疽」と解釋して問題がないと考える。この用例の前文に「血睢始發」とある。「血睢」と「氣睢」は對比して用いられていると思われる。「睢」を「氣」と「血」の病に分類したものと考える。よつて、「氣睢」は、「氣疽」という病名であると解釋する。「氣睢」とは、「心」と「腫れ物」とが混在した病氣ではないかと考える。残りの一箇所は、人體のことに用いられている。「氣」が醫學に用いられていたことを示す用例である。

以上、『馬王堆漢墓帛書』の中から、帛書の古醫書を見てみたが、主要な古典籍に見える「氣」字と類似した用いられ方をしてることが解る。

3. 出土文獻に見える「氣」字について

(10) 『馬王堆漢墓帛書』の「氣」字

(一) 『諸子百家〈再発見〉掘り起こされる古代中國思想』、淺野裕一・湯淺邦弘編、岩波書店、二〇〇四年（平成一六年）八月、三〇～三二頁。

(二) 『日本醫史學雜誌』三十三卷二號「書評『馬王堆漢墓帛書（肆）』」、眞柳誠、日本醫史學會、一九八七年、二七二～二七四頁。

(三) 『馬王堆漢墓帛書（肆）』、馬王堆漢墓帛書整理小組編、文物出版社、一九八五年（昭和六〇年）三月。

(四) 『新發現中國 科學史資料の研究 譯注篇』、山田慶兒編、京都大學人文科學研究所、一九八五年（昭和六〇年）三月、二九七～二九八頁。

(五) 『新發現中國 科學史資料の研究 譯注篇』、山田慶兒編、京都大學人文科學研究所、一九八五年（昭和六〇年）三月、一七九頁。

(六) 『馬王堆古醫書考釋』上、馬繼興著、湖南科學技術出版社、一九九二年（平成四年）一月、四一〇頁。

(七) 『五十二病方注補譯』、嚴健民編著、中醫古籍出版社、二〇〇五年（平成一七年）二月、五五～五六頁。

(八) 馬王堆出土文獻譯注叢書『五十二病方』、馬王堆出土文獻譯注叢書編集委員會編、小曾戸洋・長谷部英一・町泉壽郎著、東方書店、二〇〇七年（平成一九年）七月、五三頁。□内の文字は、小曾戸らが判讀

に推定を加えた文字。

(九) 『新發現中國 科學史資料の研究 譯注篇』、山田慶兒編、京都大學人文科學研究所、一九八五年（昭和

六〇年)三月、二五〇頁。

(一〇)『馬王堆古醫書考釋』上、馬繼興著、湖南科學技術出版社、一九九二年(平成四年)十一月、五六〇頁。

(一一)『五十二病方注補譯』、嚴健民編著、中醫古籍出版社、二〇〇五年(平成一七年)二月、一五六頁。

(一二)馬王堆出土文獻譯注叢書『五十二病方』、馬王堆出土文獻譯注叢書編集委員會編、小曾戸洋・長谷部英一・町泉壽郎著、東方書店、二〇〇七年(平成一九年)七月、一五四頁。

(一三)『新發現中國 科學史資料の研究 譯注篇』、山田慶兒編、京都大學人文科學研究所、一九八五年(昭和六〇年)三月、二四三頁。

(一四)『馬王堆古醫書考釋』上、馬繼興著、湖南科學技術出版社、一九九二年(平成四年)十一月、五四二～五四三頁。

(一五)『五十二病方注補譯』、嚴健民編著、中醫古籍出版社、二〇〇五年(平成一七年)二月、一四六～一四七頁。

(一六)馬王堆出土文獻譯注叢書『五十二病方』、馬王堆出土文獻譯注叢書編集委員會編、小曾戸洋・長谷部英一・町泉壽郎著、東方書店、二〇〇七年(平成一九年)七月、一四三頁。

### (11) 出土文獻に見える「氣」字の總括

主要な出土文獻である『包山戰國楚簡』・『望山楚簡』・『九店楚簡』・『郭店楚簡』・『上海博物館藏戰國楚竹書』・『睡虎地秦簡』・『龍崗秦簡』・『湖南大學嶽麓書院藏秦簡』・『馬王堆漢墓帛書』九種類二十五部にわたり、「氣」字と解釋できると思われる七十四箇所を検討した。その結果、「氣」・「氣」・「𠂔」・「𠂔」・「𠂔」を含め、「氣」字と解

釋すべき字は七十二箇所である。書物別に見ると、『包山戰國楚簡』に三字、『郭店楚簡』に八字、『上海博物館藏戰國楚竹書』に十九字、『湖南大學嶽麓書院藏秦簡』に二字、『馬王堆漢墓帛書』に四十字見える。『望山楚簡』・『九店楚簡』・『睡虎地秦簡』・『龍崗秦簡』に「氣」と解釋できる字は見えない。七冊検討した『上海博物館藏戰國楚竹書』に見える計十九字の内譯は、第一分冊に二字、第二分冊に六字、第三分冊に九字、第七分冊に二字である。十一種の古醫書を検討した『馬王堆漢墓帛書』に見える計四十字の内譯は、『陰陽十一脉灸經』(甲本)に三字、『陰陽十一脉灸經』(乙本)に二字、『脉法』に二字、『陰陽脉死候』に三字、『五十二病方』に三字、『却穀食氣』に四字、『養生方』に十九字、『雜療方』に一字、『胎產書』に三字である。『足臂十一脉灸經』・『導引圖』題記に「氣」字は無い。

以上を検討した結果、「氣」字は、『楚簡』には見あたらず、「氣」の原義同様に用いられていると考えられる。「气」・「氣」・「𩇛」・「𩇛」・「𩇛」のみが見える。「氣」字は、『秦簡』になり、僅かに二字見えるだけである。『漢簡』になり大量に見えることから、「氣」字は秦代から漢代にかけて用いられるようになったのではないかと推測できるが、近年大量の出土資料が発掘されていることから、「氣」が用いられるようになった時期を論じるのは早計であると考え、現状での見解に留め置きたい。「氣」の用いられ方は、現時点では主要な古典籍に見える用例と變わりないものと考ええる。

#### 4. 「氣」字について

古代の主要な文獻十七種類七百六十七箇所に見える「氣」字と主要な出土文獻九種類二十五部七十四箇所、計



四十二種類八百四十一箇所を對象とし、『十三經注疏校勘記』・『皇清經解』等の校勘記に従い検討した結果、古代の主要な文獻の對象とすべき「氣」字は七百六十四箇所、主要な出土文獻の「氣」字と解釋すべき字を七十二箇所、計八百三十六箇所である。四十二種類八百三十六箇所に見える氣の意義を見ると、「はじめに」で述べたように、「氣」が卜辭に由來し、天地自然を表す辭であつたことから、「自然界の働き」を表す用語が半數以上に用いられていると考えられる。「氣」は、古代中國人の思想を表現する辭として頻用されていたと思われる。

また、天地の間に存在する人間を「氣」字で表現しようとしていたことも見て取れる。天地自然と人體に關わる力・働きを、「氣」に込めたのではないかと思われる。「氣」字自體が呼吸を表す辭であることから、「呼吸」を表す辭にそれほど擴がりを見せなかつたのではないかと推測するが、「心」に關する用例が多いことから、古代人は、人間の「心の働き」を「氣」字で表現しようとしたと考える。

「氣」は、宇宙自然界やそこで生きる人間の根幹であり、そのものが持つ力や働きや作用を表す辭として用いられてきたのであろう。